

澁温泉水彩畫講習會(下) 丸山 晩霞

吾等がこの度の講習に就ては、其の主なる目的としては趣味の養成である、語を換へていふたら尤も趣味ある避暑といふても差支ひない。近來夏期講習會は各地に開かるゝので、その講習所の位置は何れも都會地で、交通其他の便宜上止むを得ぬ事であらふが、さなきだに苦しき炎熱の候にありて、身心共に苦汗を流すは、容易ならぬ勞働的で、精心保養の暑中休暇を無にするのである。されば夏期講習は如何にして可なるかは目下の問題である。底で吾等は歐洲にありしとき、避暑地を以て有名な瑞西の山間に遊んで、學生等の爲に設けられし講習所は到る所にあつて、各々其撰む科學の講習は開かれて居るのを見た、歐洲は申までも無く、米國其の他の文明國にありての夏期講習は、必ず避暑地と定まつて居る、等しく心を勞するにしても、一方には避暑といふ快樂と、又山紫水明といふ心の慰藉があるから、夏期の講習は快を以て得る所が多いのである、これが文明的の夏期講習であると思ふ。殊に吾等が趣味を養ふ講習に於ては、無論地を撰むの必要がある、然して在來の講習にありては、何れも學堂又は校舍等を利用するので、自然規則通りに行ふ事も出来るから講習會らしいのである、然るに今回はこの點よりすれば大に異つて居るから、會員のうちにも案外と思ふて物足りぬ感も起つたであらふと思ふが、吾等はクリストが山上の説教の如く、又釋迦が森林間の説教の如く、自然の大きな教

室を其のまゝ用ゐたのである。只一言して置きたいのは宿泊所である、吾等は山間の地にありて甘い食物は決して望まないものであるが、如何にも宿の不待遇には閉口した、一言にて云ひ盡せば、客と主人の區別が無い程であつた、それ程でも主人は大に好待遇したとの事である。人間は感情の動物であるから詔諛とは知つてゐても、上手なお世辭でも言はるゝと心もちがよいもので、醜な猫までもよく見らるゝものである、實際澁の風景はよかつたが、不待遇の爲めに餘程殺がれたのである。最初の日には先づ有名な地獄谷に出がけた、上林を發して温泉の竈に沿ふて杉の林を出づると、星河の溪谷を展望するのである、こゝより田用水の小流に沿ふて、山の面を迂曲して進めば、朝の雲を充した雜草繁茂して、雪の如き純白のトリアシシヨーマの花、さては涼しき紫の澤桔梗などの花咲きて、涼しき夏の朝の感興を深からしめたのである、この邊の山には杉多く、眞黒な杉を透して旭に輝く赤崖等面白く感じて進めば、雷の轟く如き鶯々たる音響を聞く、これぞ有名な地獄にて、熱湯を噴騰するのである。こゝにて道は星河の流に會し、一橋を渡れば浴舎あり、地獄の湯といふ。この附近一帶は各所より熱湯湧出して居る。吾等は先づこの附近に於て各々位置を撰みて寫生することにした。熱湯の噴出を地獄といふは、文字の上より大に驚怖すべきであるが、今はそれ程にも感じなかつた、されど發見の時にありて、巨樹鬱葱として人跡無き深谷の間に、かゝる自然の大活動に接したなら、如何にもその奇しき感と驚

怖とに打たれて、地獄的感を起したであらふ。溪谷なれど盛夏の炎熱は中々に苦しい、加ふるに河原の石は皆焼けて、この間に三脚を立てて、思ふ如く運筆の出来ぬ苦と、外部なる暑氣の苦とにて地獄的だと叫んだものもあつた。この附近は畫材豊富で、溪流、山岳、森林等の研究に好適地なれば、或は午前或は午後と、毎日の如く出かけたのである。地獄谷に行くのを単に地獄に行くといふ如くなつて、この理由を知らざる人の耳には奇しく響たであらふ。

上林の高丘を下ると沓野温泉場にて、北國街道の宿驛で、今はさびれて居るから、道路山水等の好畫材で、この邊は宿から最も近い寫生區域である、この驛に神社の杉の森がある、日盛りの炎熱にはこの森の中に這入つて寫生したものも多かつた。

沓野の驛を下ると星河の河原である、西は沓野の丘で、ここには樹木が深綠色に茂つて居る、東岸は温泉寺といふ寺と境内の杉の森、それより星河に沿ふて澁の温泉場となり、北の方は澁より沓野に渡る和合橋といふがある、南は地獄谷の山々が高く聳立して居る、この河原にて四望すれば、種々に變化した位置の畫材がもとめらるゝのであるから、こゝも寫生地として毎日の如く出かけたのである。

沓野の田甫を経て西に五六丁程進むと展けた谷がある、こゝを角間谷といふて、崖を下りて河原に出づれば、こゝの流は水清く、所々に柳の森、河原子、コ草等茂りて、畫材又豊富である、こゝも寫生區域となつて時々通つたのである。

角間川の水源は横手嶽より發するので、中流に瀑布がある、この瀑布は含滿瀧といふて、普通は北國街道より見下すのであるが、吾等は角間川の流に沿ふて瀧壺まで極めんと、余まづ卒先して賛同者十數人を得、案内者を賃して出發した、この一行に某子爵とその夫人も居つた、流に沿ふて上る、無論道は無い、沿岸を辿る、沿岸極めて急流を渡る數十回或ときは崖を攀ちて山の面を迂回し、又は木の枝に頼りて斷岩を傳ふ危険を犯して漸く瀑布のもとに到る、奇岩絶壁の間にかゝれる大飛瀑、高さ四十丈幅六間といふ、巖々として山谷に響き、瀧壺に落下するさまは實に壯觀を極め、この間の趣を寫生し、こゝより絶壁を攀ちて山頂に達するので、その危険なるは、岩角木の根を命の綱として攀ちたのである、幸に皆無事に目的を達したのである。然して一行に加はりし軟弱なる一婦人が、よくこの行を共にせしは實に賞讃すべきである。吾等登りつめし山頂は琵琶池のある處にて、この日琵琶池方面に出かけし一行に會し、池畔に咲ける柳蘭等採集して歸る。

右の如く晝は寫生し夜は講話をなして、長しと思ふた二週間の講習は終了したのである。この間茶話會及び送別會等ありて、何れも盛會であつた。只余の遺憾とせしものは、この附近數里に涉りて、平家の落武者が隠れしといふ有名なる秋山郷、其他山中の湖として有名なる大沼池、山として高山に數へらるゝ苗場山、岩管山、横手嶽、飯盛山等に行かなかつたのである、講習中山登りの賛同者を求めて得ず、余は講習終了して横手嶽

白根活火山に登り、更に信飛の山系日本アルプスの稱あるその一角、越後越中信濃に跨る白馬山(海拔一萬千尺以上)に登り、今秋公設展覽會に出陳する畫の製作を爲し、それより信州にて有名なる北安曇の北城より柳澤嶺を越へ、戸隠山中に入り、裾花の水源を極め流に沿ふて長野に出て、各地の洪水に遭逢し、瀛車にて入る可き東都に船にて歸京した、その紀行は次號より掲載しやうと思ふ。

(了)

遠州より

拜啓

夏草に交りて早き桔梗かなと申七草から、秋の花は咲き初め申候、山路野路が程を歩き候へば、山萩がこぼれ、ちゝろの虫が鳴き居り申候、をさな子がけさ百舌鳥がなきたる故天氣になるがうれしいと申候が、果して晝近くより晴れて、青空高く鱗雲がみえ申候、時は天下の秋となり申候。

秋の草はみなすきにて候、七草はいはずもかな紫苑鶉頭雁來紅野菊穗薄みなすきにて候、秋海棠芙蓉朝顔木槿などいやは無之候も、總て鉢に庭にさかせたるよりも、野に山に咲きたるこそ、一入に有之候はめ。

虫にても松蟲鈴蟲もすきにて候も、あまり枝巧を弄し過ぎはせぬかと、少しくいやにて候、破れたる古寺の軒の竈、くされたる賤が家の竹垣などに、ちゝろとなく、蟬イトなどが一番うれしく候、馬追機織さては轡虫などは、俗中の俗たるものなるべく候

然し綜合したる蟲類(自然の上からみたる)としては、どれもこれもみなありてよろしかるべく若し、人としても藝術家としても、全體の上よりみるときは、變化多様なをこそ貴み申すべく、自己の好き嫌ひと云ふ點より價値は定り申まじく候。兎に角秋の風物は目に音にさやかにして、清くすみたるころ一點の濁もよどみもなき處が、うれしく候、クワンとしたる高い響は秋より外には無之候、これからがその秋にて候、吟腸そぞろに興を催し申候。

旅は人を新ならしめ申候、旅行を知らず旅行を貴ばざる人は趣味ある人にては無之候、旅行に重を置かざる美術家は美術家にては無之候、文學家でも美術家でも、素人でも、黒人でも、旅行の味を解さぬものは、藝術家にあらず、藝術を尊む人にては無之候、自己の見界を廣めるのは、自己の藝術的才能を廣むるにて候、自己の新奇なる見聞は、自己の價値を作る處の基礎にて候。飽の來たる美術文學は、陳腐平凡なるものにて候、否々墮落せる美術文學にて候、理想の那邊にあるかを疑はする美術文學は、此世に論す處の美術文學にては無之候、敢て旅には限り不申候も、旅は此好個の一手段にて有之候。

今夏に於ける御旅行の詩囊畫囊はさこそと思ひ偲び申候、白根山白馬が嶽の頂に小な黒點を印せしは、先生が姿なりけめと心中に此景色を彷彿せしめ申候。

ゆつくりと拜聽の時を期し申候。

迂生未だ故郷に在り申候、到底我々の生活は天地と共に悠々た